何事にもチャレンジ！

前迫　千波（初教6期生）

私は地方公務員となって十年を迎えています。

地方公務員、中でもより人口の少ない町村の職員は、より住民と接することも多く、人々の生活や地域に密着した仕事をしていると思われます。それだけに住民の方のよろこびを直接受けられる反面、厳しいご意見も多くいただきます。

仕事の内容は、多様です。住民票を発行したり、税額を決定して徴収したり、道路の維持管理や公民館活動に携わったり。私の場合は、総務課の庶務、商工観光、そして老人医療事務にかかわってきました。

さて、私の文教での充実した4年間を過ごすこととなったきっかけは、1年の臨海実習の実行委員長になったことです。それまで何もやる気がなく何の担当にもなっていなかったので、実行委員を決める時最後に残った委員長の席をいただくことになりました。臨海実習の準備として、現地の下見、スケジュールの決定、食事の献立、パンフレットの作成などがありました。習い始めのワープロと毎日にらめっこの日が続きました。

次の年は新入生歓迎行事の2泊3日の合宿の実行委員長（学友会副会長兼任）ということは後で知りました。その次の年は学友会会長と、仲間とともに組織の運営にかかわりました。組織の一員として自分の位置を認識しどう動けばその組織がよりうまく運営されるか考えながら動いていくことを学んだ期間でした。それは今の職場でも共通した課題です。

友人、先輩、後輩に恵まれた初教の課程で学んだこと、学友会で体験したことは、2児の母として、働く女性として今後も多くの場面でいかされると思います。「何事にもチャレンジ」を最後にみなさんにお薦めします。

町内の菊花展にて（後は菊市町の町花です）

幼稚園での生活

佐々木　敦子（幼教22期生）

かわいい子どもたちと一緒に

早いもので、私が幼稚園教諭になって7度目の春を迎えました。毎年受け持つ子どもたちは、それぞれに個性があり、日々新しい発見があります。だからこそ私自身の勉強の場にもなっており、子どもたちのおかげで成長させてもらっています。毎日が予測できないことばかりで、それだから楽しく保育ができ、子どもたちとおもいきりあそべるのかなと思います。

幼稚園での1日は毎日あっという間に終わってしまい、もっとああしていればよかったこうしていればと反省することも多々ありますが、明日につながればいいと、考えています。

子どもたちが笑顔で話しかけてくれる時、涙をうかべて何かを訴える時、話したいんだけど上手く話せない時など、どんな時でもきちんと受け止めれば、子どもとの信頼関係ができてくるということを実感しています。

また、私が心がけていることは、"笑顔"と"子どもと同じ目線で話しをする"ということです。

私は昨年11月に結婚をしました。一度は仕事を辞めることを考えたのですが、今はこの仕事が楽しくてたまりません。仕事と家事の両立は思ったより大変です。それでも辞めなくてよかったと思っています。どうしてそう思えるのかといえば、幼稚園で多くの子どもたちの笑顔に出会えるからです。時には辛い時や疲れる時もありますが、子どもの笑顔を見ると、疲れも吹き飛んで行ってしまいます。

わすれてはいけないことは、初めて勤務したあの日のことを思い、いつでも初心に戻るということです。今あらためて思うことは、幼稚園の先生になって本当によかったということです。

これからも楽しく幼稚園での生活を送ろうと思います。

「ふくふく」でつながりあい

森本　タエ（初教15期生）

今年の4月から山口県人会の教員をめざしている人達で、新聞を発行しています。名前は、山口県の名産物の「河豚」と「福」をかけて「ふくふく」としました。山口県出身者、また山口県内で教師として活躍している人や教師をめざしている人たちの集まりです。近況や悩み、情報等を交換していくことにより、お互いに励まし合うことを目的として始めました。

「ふくふく」は15期生の卒業をきっかけとして、第1号が出来上がりました。大学在学中、教員採用試験の準備（音楽や体育実技、面接等）をいつも一緒にやっていく中で、お互いに励ましあったり、情報の交換をしていました。が、卒業をすると、その機会が極端に減ってしまいます。そこで「お互いに情報を交換できる場所を作ろう」ということになり、「ふくふく」が誕生したのです。（3頁へ続く）

ふくふく結成メンバーによる研修旅行（チボリ公園）のスナップ

これまで臨時号を含め3号の『ふくふく』ができました。（5月末現在）。先輩方や後輩の皆さんにもお知らせし、広く読んでいただいています。5月号には先輩方のお便りを載せることができ、とても嬉しく思っています。これからは、後輩の皆さんの意見等も載せていく予定にしています。先輩方からは経験した様々なことを、後輩の皆さんからは新しい情報等をぜひ提供していただき、互いに吸収していければと思います。なお、12期生以降の方から配っていますので、ご希望の方は大学に連絡してください。

『ふくふく』が横だけでなく縦のつながりを作るきっかけになれば嬉しいです。また、山口県人会の皆さんだけでなく、他県の方もぜひ読んで参加していただきたいものです。毎号、次回の担当者の住所も掲載しますのでよろしくお願いします。

『ふくふく』を作成していくうえで、植田先生を始め多くの先生方にお世話になっています。この場を借りておれを申し上げます。ありがとうございます。そして、これからもよろしくお願い致します。

VIVA！9期生

星　容子（初教9期生）

バーイ！母子ですが初教の元気娘でした

私はあることを除けば、どこにでもいる平凡な主婦。現在、佐賀県武雄市に夫と2人で暮らしています。大学を卒業後は故郷の山口県で5年5ケ月小学校教員として働きました。その間、運命的な出逢い？により結婚。そして、夫の転勤を機に退職。現在に至ります。さて、「あることとは？それは、初等教育学科9期生の一員であるということです。

私たち9期生は入学当時「前代未聞の問題児学年」と言われ、先生方を困らせていたようです。しかし、私たちはただの問題児ではありませんでした。溢れんばかりのパワーを活動につなげていったのです。これまでのやり方にとらわれず、自分たちのスタイルを築き上げていきました。活動をする度に、お互いを知り、認め合い、励まし合うという雰囲気もできました。これが卒業時に倉田先生に「よく破壊してくれました。よく殺傷してくれました。」と言わせた所以でしょう。

そして、卒業してもその絆は消えることはありませんでした。倉田先生が文教を退職なさる時に集まったのがきっかけで始まった同窓会。その後は2年ごとに開催することが決まり、先日第2回の同窓会が佐賀県唐津市で行われました。結婚しても出産しても変わらぬ仲間の姿がありました。睡眠時間を削って声が枯れるほど語り合いました。久しぶりに会っても、違う道を歩んでいても、なぜか分かり合える。だから、悩んでいる時や辛い時こそ、みんなに会いたくなるのです。

思えば、あらゆる節目で9期生の仲間に助けてもらいました。折角なった教員を辞める時も「教師の代わりはいても、家族の代わりはいないよ。」という仲間の言葉で心が決まりました。佐賀県に来てからも、寂しい思いをしている私を救ってくれたのは、やはり9期生の仲間でした。ありがとう9期生！すばらしい仲間にめぐり会えたことに感謝するとともにこの絆がいつまでも続くことを願っています。

〈学園レポート〉司書教諭になって

藤中　眞由美（初教12期生）

初教出身者の中には、在学中に取得した資格を生かして専門的な職につかれている方もいます。今回は、司書教諭として活躍されている藤中さんにお話をうかがいました。

―こんにちは。まずはじめに、勤務されている日彰館高校のことを教えてください。

「広島県の北部、双三郡吉舎町にある高校で、1学年3クラス、生徒数約330人の小規模校です。」

―生徒さんの様子はどんな感じですか？

「どの生徒さんも、わりとのんびりした雰囲気をもっていて、あいさつもきちんとできるし、素直で人懐っこいです。」

―なるほど。では、ふだんは司書教諭として、どのような仕事をされているのですか？

「本の発注、受け入れ作業、整理、貸し出し業務や図書委員会活動など、とにかく図書室を運営するための仕事はたくさんあります。いついつまでにこれはしておかなければならないというような時間の制約を伴う仕事は、あまりありませんが、新しく入った本はなるべく早く貸し出しが出来るように心掛けています。ふだんは、授業中に本の整理などをして、休み時間は図書室に来る生徒さんの対応をしています。」

―司書教諭の仕事以外、例えば校務分掌などは何が任されていますか？

「そうですね、校務分掌で庶務・視聴覚係をしています。私は主に視聴覚を任されていて、始業式や生徒朝礼の時にはマイクなど放送の準備をしたり、先生方から希望のあった教育番組の録画などをしています。その他、3年生の副担任や新聞部と水泳部の顧問をしています。」

―司書教諭としてやりがいを感じるのはどんなときですか。

「先生方や生徒さんが、調べものをしたり読みたい本を探して満足のいく本や新聞などの資料を提供することが出来た時や、紹介した本を『おもしろかったよ』と言ってもらえた時にこの仕事をしていて良かったなと思います。」

―では、学生時代の思い出にはどんなことがありますか？

「たくさんあります。私は美術専修で卒業論文は絵画制作だったのですが、ゼミの友だちと、休みの日や夜おそくまで残って絵を描いた（4頁へ続く）

お仕事中の藤中さん